

あるかいど 第六十一号 春号 目次

〔小説〕

風よ海よ空よ	泉	ふみお	4
デイドリーム・ビリーバー	赤井	晋一	23
やがてジャズに変わるまで	高原	あふち	43
阿曾 ^{あぞめ} 女の春	西田	恵理子	57
杭を立てるひと	住田	真理子	81
楓	奥田	寿子	100
わかっているよ	向井	幸	119
鳶よ	池	誠	134

「エッセー」

共生幻想

佐伯 晋 148

瀬戸内は広し、真牡蠣は旨し

小島 千佳 152

スーパームーン

木村 誠子 157

「旅行記」

西廻りの旅

高島 寛 171

同人誌評（文校関係誌）

善積 健司 198

あるかいど 59・60号の反響

同人名簿

編集後記

207 206 204

表紙・扉絵 高原颯時

デザイン 村尾雄太

【あるかいど59・60号の反響】

■三田文學 二〇一七年冬季号

新同人雑誌評 柳澤大悟

木村誠子「海始まる」(「あるかいど」59号)は、大学時代にホスピスで出会ったガン末期患者の男性についての回想と、四十九歳になった「私」がその患者の憧れていたポルトガルのロカ岬へと向かう道中が、平行して書かれています。引用がちりばめられ、それらが作品にまとまりを与えているように感じます。「どんづまり」という言葉が叶わぬものへの憧れと結びつき、脆くて優しい印象の短編でした。

■文芸同志会通信

二〇一七年一月十二日

「あるかいど」第60号(大阪市)

住田真理子「太陽の塔」一九七〇年の大阪万博の開催の時期、主人公は十二歳であった。その頃、母親は万博見物に出かけるために、シヨートパン

ツで行くつもりだったが、太ももの痣が隠せないで、諦めてスラックス系にする。万博見物にうかれているうちに、岡本太郎の太陽の塔の作品を目の当たりにして、母親が気分を悪くして倒れてしまう。母親が、太陽の塔に表現されたもののなかに、人間の残酷さや悲惨さ、暴力的に崩壊させられる暗黒的側面の意味が含まれていることを読み取ってしまったのだ。それが、母親のトラウマを直撃する。そこから母親の太平洋戦争の空襲の出来事の独白に入る。女学生たち全員が海軍工場で作業に駆り出されていた時に、米軍爆撃機の攻撃にあい、みんな逃げまどうが、運命の紙一重で、生死がわかれてしまう。ことに母親の友人であったカヨちゃんも、身体を破壊され、奇跡的に助かった母親の腹の上に重なって絶命する。母親は、その時に腹と太腿に傷を負ったのだった。母親もしばらくは、行方不明者のなかにいれられていたが、やがて発見され命は助かる。カ

ヨちゃんの家族は、カヨちゃんが、どこでどうなって死んでいったか、知りがたがるが、母親はあまりの悲惨さに、事実を語らずにいるという話。また、その語れないということも深いトラウマになっているのだ。岡本太郎の太陽の塔の表現の奥深さ。私は取材であったが、新婚間もない妊娠中の妻を伴って、万博に行った。塔のエネルギーの強さが、ある圧迫感で迫ってきたのを記憶している。太陽の塔の人間の業の裏表の存在を浮き彫りにする迫力と、母親の過去の悲惨な体験を娘に記憶させるという、重ね合わせた手法は迫力と説得力がある。芸術はゲーテ「若きウエルテルの悩み」やピアフのシャンソン「暗い日曜日」のように、若者たちを自殺にさそうほどの力をもつことがある。現代は、ピコ太郎の「PPAP」のような、視覚とリズムに強烈に訴える刺激の強いものがあふれる。そのなかで、文章による視覚的效果への挑戦として、よく計算されている。ほかに、

現代風俗に絡めた作品があつて、触れる気であつたが、今回はこの作品で充分と思つた。襟を正さねばという思いがする。

なお、編集後記のなかで、善積健司氏が二〇一六年（原文は二〇一七年となつてゐる）が気が早すぎる）九月の第四回「文学フリマ大阪」が開催され、雨天の中二〇〇〇人が来場したことや、一〇〇部以上売り上げた同人誌の存在もあることを報告している。
紹介者Ⅱ「詩人回廊」編集人・伊藤昭一

■図書新聞 二〇一七年二月十一日

評者 越田秀男

英雄の対偶は常民。現代の常民は？「ウララ」（小島千佳／あるかいど第60号）はアラウンド40の黄昏版。ウララとは、あの山本リンダのウララ、小説のテーマ曲。母の三回忌で集つた家族、すると父が急死。狭く不快な病院の霊安室に葬めく家族を（私）はネズミ講だと思ふ。その繁殖作業に加われなかつた

私。そこに父の昔の愛人が現れ……。気がつくると私は孤独の沼に沈んでいた。一億総活躍社会を担う中心的世代の実像。

発行所

〒545-0042

大阪市阿倍野区丸山通2-4-10-203

高島方

編集後記

●「あるかいど」はここ数年どの号もいくつかの同人誌評がとりあげられて、勢いが盛んで年三回にしたのだが昨年(58、59、60号)に一作も書いてない人が三十人のうち十人もいて、そのかわり年三作、皆勤賞は五人いた。同人誌だから全員参加が望ましい。そこまでいかなくても、これは問題だ。せめて年一作は書いて欲しい。●素材が身辺雑記の場合、やがて書くことがなくなる。これをどう乗り切るかである。日常を異化して、どう非日常を書くかである。●去年の暮れに十冊目の本を出した。そこには七作品がおさまっている。七作の十冊、七十編を書いたことになる。本になっていない作品を含めると百編ぐらい、五十年で書いたということ。いろんな意味で、ありえない事を書いていると批評があった。●ありえないことを書くのが小説だといなおりたい。そこに異化された新しい世界がひろがる。その醍醐味を味わって欲しい。(寛)

■スウェーデン・アカデミーに現代文学二十万冊を取めた図書館がある。うち日本文学は四七〇冊。十冊以上取められている作家は、多い順に大江健三郎、井上靖、村上春樹、三島由紀夫、川端康成、安部公房、谷崎潤一郎、小川洋子。■比較文学者の秋草俊一郎によれば、この二十年間に米国で刊行された8種類の世界文学アンソロジーで、日本人作家の登場回数をみると、樋口一葉(7回)、川端康成(6回)、谷崎潤一郎(4回)、与謝野晶子・芥川龍之介・村上春樹(3回)、三島由紀夫・大江健三郎(2回)。■一葉の評価が高い理由は、①アジアで最初の職業的的女性作家、②作品が短くアンソロジー向き、③西欧文学の影響を受けていないこと。鴉外や漱石の作品は、西欧文学の模倣に写るようだ。西欧人は「日本らしさ」の純度を求めるらしい。■だが、あくまで西欧人の尺度に過ぎない。明治期の文体変革(文語→口語)、急激な欧化主義などを経て、熟成されてきたオリジナルの「日本文学」もある。(晋)

あるかいど 61号

発行日 2017年4月1日
頒 価 1000円(送料別)

発行人 高島寛
編集人 佐伯晋
編集委員 木村誠子 小西九嶺 池戸豊次 高原あふち 善積健司 小島千佳
発行所 〒545-0042 大阪市阿倍野区丸山通2-4-10-203 高島方
Tel: 06-6654-1750
制 作 (株)セイエイ印刷
〒536-0016 大阪市城東区蒲生2-10-33
Tel: 06-6933-0521 Fax: 06-6933-0241
E-mail: seiei@mbm.nifty.com